

平成15年1月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

秋の山のクマダナ

奥多摩の山には、食肉目クマ科に属するツキノワグマが生息しています。奥多摩の動物としては大型ですが、世界的なクマの種類の中では中型で、標準的な成獣の大きさは頭胴長（鼻の先から尾の付け根までの長さ）140 c m前後、体高（地面から前足の肩までの高さ）55 c m前後、体重80 k g前後です。日本に生息する他のクマ科の動物として、北海道にヒグマがいますが、奥多摩でクマというとツキノワグマのことをいいます。

多くのクマ（ツキノワグマ）は、厳寒期（大体、冬至から春分まで）には冬ごもりに入ります。そのためクマたちは、夏の終わりから秋にかけて、木の実などをたくさん食べて栄養を蓄えます。特にクリやドングリ類などの実（堅果類）を好みますが、それらの木の実を食べるとき、クマは枝の先端近くまで巧みに登ります。そして、枝を折ったり手繰り寄せたりして実を食べると、枝を自分の体の下に敷き込んで、大きな鳥の巣のようなかたまりを作ります。こうした木の枝のかたまりを、クマダナ（熊棚）、クマザ（熊座）、エンザ（円座）などと呼びます。この時期に折られた木の枝の葉は冬になっても落ちないため、クマダナは冬枯れの林の中でよく目立ちます。

平成13年の秋、奥多摩の山ではこうしたクマダナを例年以上に目にしました。特に、小菅川の上流部（山梨県北都留郡小菅村）に多く、標高1300～1600m付近のミズナラの木に集中していました（ミズナラの実は大粒のドングリで、イノシシやネズミ、カケスなど多くの動物の食べ物となります）。登山道を歩いているだけで、枝先がほとんど折られているミズナラや、木の周辺に直径5～10 c mほどのかなり太い枝までが折られて散乱している状態を見ることが出来ました。小菅川上流部以外では、御前山～小河内峠間（標高1200m付近）、笠取山・一休坂周辺（標高1500m付近）、柳沢峠～六本木峠間（標高1600m付近）などで、ミズナラの樹上にクマダナが作られていました。柳沢峠～ハンゼの頭（三窪高原）では、頭上間近にミズナラのドングリを食べるクマの姿も目撃できました。

ところが、平成14年の秋、前年と同じ場所を歩いたのですが、柳沢峠～ハンゼの頭（三窪高原）（裏面につづく）

窪高原) でまとまったクマダナが見られた以外、新しいものは作られていませんでした。前年、非常に多く作られた小菅川上流部でも、まったく見あたりません。

クマの成獣・雄の行動範囲は1年間で40平方kmなどといわれます。毎年同じ場所にクマダナが作られる保証はありません。更に、平成14年の秋は、クリ、ドングリ、マタタビ、サルナシなど木の実が豊作だったようです。クマも採食場所を狭い範囲に集中する必要はなかったかも知れません。電波発信機などを用いた追跡調査を行えば、こうした変化の原因を突き止められるでしょうが、山道を歩きながらクマの行動をあれこれ考えてみるだけでも、その存在が身近に感じられるようになります。

(文責 桜岡 幸治)